親友、その次は？

タチクラミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親友、その次は？

【Ｎコード】
Ｎ８０６３Ｌ

【作者名】
タチクラミ

【あらすじ】
ある日を境に慧はいなくなった……親友の俺にさえ何も言わずに。
だから俺は探そうと決心した。
だが見つけた時にまさかあんなことになってるとは、想像だにしなかった。
まさか慧が女になってるなんて

※この小説はギャグよりになりますが、最初は少しシリアスになる予定です。

当たり前がずっと続く訳じゃない（前書き）

やっちまった（汗）

不本意にも伝説となった魔女の更新速度が半端なく遅くなってるのに新シリーズ始めてしまった。

こっちは文芸部で最近書いてる小説で、自分の更新速度を著しく下げてる要因です。

なんかせっかく書いたのに何もしないのは時間的な問題で、もったいないので投稿します。

不定期更新です。

当たり前がずっと続く訳じゃない

「ん？どうした、腹、痛いのか？」
「そう……なのかな？なんかお腹に違和感があってさ」
「おいおい。サッカー部のエース様が体調管理ぐらいできなくてどうする」
「僕と拓馬（たくま）二人合わせて、でしょ？それにこれくらい何でもないよ」
「無理してやがるな、慧（けい）？またズボンを右手で掴んでる。幼馴染の俺を欺きたいならまずはその癖をどうにかするんだな。わかったらさっさと帰れ」
「……やっぱり騙されてくれないか。仕方ない、じゃあお言葉に甘えて今日は帰るよ」
「ああ。気をつけて帰れよ。お前は声変わりしていないうえ、ぱっと見美少女にしか見えないんだからな」
「なっ！そこは普通慰めるところでしょ！！何で人が気にしてること言うかなぁ！？」
「ククッ。それだけ叫べればすぐ元気になるだろ。……だからそう不安そうな顔をするな」
「～～～～っ！！！帰るっ！！」
「早く元気になれよ。みんなが心配する。もちろん俺もだ」
「……うん。また、ね」
「おう、またな」

中学生の春。
夕日が差し込む教室での何気ない会話。
いつまでも続くと思っていた日常。
このときの俺は、次があることを疑いもしなかった。
だから慧が入院したと知った時も、面会できないと知った時も何もせず、命に別状がないのなら、と慧のいない非日常を過ごしていた。

それが俺と慧に大きな溝を作っていることに気付きもせず。
次なんて二度とないことに気付きもせず。
馬鹿な俺は、全てが手遅れになって初めて自分の考えの甘さを知った。
その代償は、慧の転校及び転居というあまりにも残酷なものだったが。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

あの教室での会話以来、俺はただの一度も慧に会うことはできていない。
担任に土下座する勢いで頼み込み、慧と俺の中の良さを知っていた担任が住んでいる土地だけ教えてくれたが、何度足を運んでも慧の影さえ見つけることは出来なかった。
当たり前だ。手がかりなんて何一つないのだから。
それでも俺は、何度も何度も足を運び慧を探し続けた。
以前、友人になぜそうまで焦るのか、と聞かれたことがある。
その時初めて俺は、俺が焦っていることに気がついたのだ。
それまで俺は言いようのない不安に突き動かされていただけだったのだが、考えてみるとそれは焦るという感情に他ならなかった。
俺は焦っていた、何も言わなかった慧に。
いや違う。

何も言えなかった慧に、だ。

何故こういえるのか。
それは慧が俺に何も言わずに去っていくなんてありえないことだからだ。
これはけして自惚れではない。
そう言えるほど、俺と慧の共に過ごした時間は長く濃密なのだ。

なのに、何も言わずに去っていった。
なら何も言えなかったと考えるのが妥当だ。
……理由は、分かってる。
転校してしまうほどのことなのだ。面と向かって話したいにきまってる。
でも、俺は会いに来なかった。
面会謝絶なんて言い訳にもならない。
会おうと思えばいくらでも方法はあったのだ。
あいつが一番辛い時に一緒にいてやることもできたのだ。
だが、俺は何もしなかった。
結果、慧は何も言えずに去るしかなかった。
そう考えたから俺は焦っている。
言えないほどのことなのだ。
慧からの接触はまずないと考えていい。
だからこそ俺が会いに行かなければならない。

もちろんすべては想像にすぎない。
慧は本当に二度と俺に会うつもりがないのかもしれない。
だが、それがどうした。
あいつはまたね、と言った。
それだけで会いに行く理由は十分だ。
あいつが困ろうとも知ったことではない。
俺は俺のために会いに行く。
生憎俺はあきらめが悪いんでね。
たった半年探した程度で、はいそうですかって引き下がれるか。
それにこの半年まったく成果がなかったわけじゃない。
あいつの学力で行きそうな高校は見つかった。
俺には少し辛いかも知れんが、合格圏内だ。

さぁ待っていろ、慧。
必ず見つけだしてやる。

現実は意外と都合がいい（前書き）

更新が遅すぎですね…

次話はもっと早く更新できるよう頑張ります！！

展開はかなり早いです。

現実は意外と都合がいい

「うがぁぁ～～～～」

早くも挫折の予感。
受験？
合格はしたさ。
でも慧がいるかどうかは別問題。
そもそも最初に俺はいる可能性と言っていたはずなのに、言い続けてるうちにいつの間にか合格すれば慧がいるに変わってたのに気がついたのは入学してから。
はい、遅すぎです。
焦った俺は急いで男子の欄から如月慧の名前を探したがもちろん見つからない。そうそう現実は都合よくない。
見落としてないかって？
ないな、うん。
何故自信満々なのかって？
今の俺は出席番号順に全クラスの男子の名前を言えるんだぞ？
これで見落としていたら俺の目は節穴以下だ。
……偉そうに言ってますが無論強がりです。
これで完全に手掛かりは断たれたわけなんだから、文句ぐらいは言わせて欲しい。
はぁ…また別のアプローチの仕方を考えるか……
俺は思考に没入しかけて

「おっ、拓馬がついに壊れたか？」

――――不意に戻された。

「んなわけねぇだろ。後にも先にもそんな予定はない。ってかついにってなんだよついにって」
「わからねぇのか？お前の変人っぷりはこのクラス公認だからな。〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

まだ何か言っているが無視をする。馬鹿に付き合ってるほど俺は暇じゃないんだ。
ちなみに俺が変人という不名誉な認識をされている理由は入学式に気がついて焦った俺がクラスメイト全員に慧の事を知らないかって聞いた結果である。
今は反省している……
もっと他にやり方があっただろうに。
それだけの犠牲を払っていながらなんの情報も得られなかった。
振り出しに戻るってか？
上等、前回みたいにエリアを絞って歩き回るか。
それとも張り紙でも作ってやろうか？
街中で聞き込みをするのも一興。
苦労すれば苦労するほど見つけた時の感慨はひとしおだからな。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜って聞いてんのか拓馬！」
「うおっ！すまん聞いてなかった」

どうせどうでもいいことだからな。
そんな心の声は置いといて。

「ったく……今度は聞いてろよ。なんとこのクラスに入学式すら来てなかった複学生が来るのだ！」
「……それは複学生って呼んでいいのか？」
「冷めてんなぁ。美少女だぜ美少女！俺がこの目で見たから間違いない！」

美少女って言ってもな……。俺はそこらへんの美少女よりはるかに可愛い男を知ってるからさ……。色々と複雑なわけよ。着替えの時、毎回無駄に色気があったからな。

馬鹿なことを考えていると担任が教室に入ってきた。

「おぉ～い。ＨＲ始めるぞぉってその前に複学生を紹介しよう。男子諸君喜べ！とびっきりの美少女だ！！」

「「「「うぉぉーーー」」」」

おい教師、それでいいのか。その発言微妙に問題ないか？

「さぁ入ってくるがいい！」

「失礼します」

「……なっ！？」

ドアを開け入ってきた人物を認識した時思わず声をあげてしまっていた。

だがそれは始めてみるクラスメイトの登場に沸き立つ教室の歓声にかき消された。

「～～～～！」

「～～～～～～！」

「～～～、～～～～！」

様々な声が飛び交うが今の俺はそれが意味ある言葉として聞こえなくなっていた。

その声をものともせず俺の意識を根こそぎ奪っていった人物は平然と教壇の前に立った。
俺にはもうそいつしか見えなくなっていた。
仕方ないだろ、この半年常に探していたんだ。もし何も感じなかったらそれこそ変だ。
「……お前はいなくなる時も現われる時も突然なんだな」
そう愚痴る俺の顔には確かな笑みが張り付いていた。
そう複学生としてやってきたのは俺の親友――――如月慧だったのだ。
俺は喜びのまま慧の名前を叫びそうになり、はたと気づく。
――――何かおかしい。
俺はこの学校に入学する男子の名前はすべて覚えている。
なのに慧の名前はどこにもなかった。
転校性ならそれでおかしくない。が、慧は複学生だ。
入学式に参加していなくても記録ぐらいはあるはずだ。
それにさっき担任は何て言った？
慧は見た目は完全に美少女だ。女と間違われないことは一度もない。
だが、それを担任がするか？
ちゃんとした資料を持っている担任が。
なにより今教壇の前に立っている人物はこの学校指定の女子の制服を着ている。
慧は姿こそ美少女だが立派な男だ。
――――それでも、他人というには似すぎている。

そこまで思考が至ったところで慧（？）が自己紹介を開始した。
「私は東雲京（しののめきょう）と言います。皆様に最初で最後のお願いをします。――――どうか私に関わらないでください」
――――しん

教室は水を打ったように静かになった。
クラスメイトが口々に「え？冗談だよね？」などと囁き合っている。
混乱しているのだろう、突然そんなことを言われて。
俺は別の意味で混乱していた。
もしかしたら慧かもっていう期待をしていなかったわけじゃないが、
混乱している理由は……いや、まさにそれが理由だろう。
まずは東雲という苗字についてだ。東雲の苗字は慧の母親の旧姓にあたる。
そして、京という名前。京という漢字は「けい」とも読める。
名前を変えるにはあまりにもお粗末。

俺はこの時点ではある程度確信をしていたが、それでも性別の差というのは絶対的な確信を持つには大きかった。
――それもすぐに関係がなくなったが。

「あぁ～～、東雲はこういう奴だが仲良くしてやってくれ。特に女子。同じ女同士なんだからすぐに仲良くなれるだろ。東雲は後ろに空いてる席があるからそこ座っといて。ではＨＲを始めます。～～～～」

俺はこの時目線が東雲の手元に固定されていた。正確にはスカートの裾を握りしめている右手に。
……その姿はあの日の慧とひどくかぶった。
そして確信した。
東雲は席を移動している時に俺を見て一瞬だけ表情を変えたのだ。
それはある程度親しい人でも分からないほどの微妙な変化だったが俺は見逃さなかった。
親友の俺をそんなにわか仕込みのポーカーフェイスで欺けると思うなよ？
なにがあったかも、どうして女子の制服を着ているのかもわからな

いがこれだけは言える。
———東雲京は如月慧だ。
意外と都合がいいな、現実も。

幸か不幸かあの自己紹介のおかげで慧の周りには誰もいなく近づくことも容易だ。

ガタンッ

俺は存在を主張するように音を立てて立ち上がった。
そのまま慧のもとに向かう。
周りから勇者だ、なんだと囃されるが気にしない。
教室はそこまで広くなくすぐに慧の机の前についた。
慧はやはり身内にしか分からないような微妙な表情の変化で反応した。
すぐに平静を装い口を開いた。

「……関わらないでください、と言ったはずですが？」

俺はその言葉を聞きもせず目の前の馬鹿にのみ聞こえるように小声で言う。

「（……今ここで事情を話すか、今から校舎裏に来るか選べ、なぁ慧？）」

今度こそ本当に表情を変えた。
先ほどまでのように身内にしか分からないような微細な変化ではな

くしっかりと。
俺は答えを聞かずすぐに教室を出た。
答えなんて分かりきっているからな。
俺は何故か勝ち誇ったような気分になった。

クラスメイトは表情を変えた東雲と勝ち誇っているような笑顔で去っていく拓馬を見て、ひたすら疑問符を浮かべていた。

そうそう簡単にはいかない（前書き）

テストが終わったので更新速度上がります

そうそう簡単にはいかない

「……ちょっと性急すぎたかな」

慧を呼んだ校舎裏で猛烈反省中デス。
京が慧であることに疑いはないのだが、流石にいきなりすぎたもしれん。
来るかどうかも怪しい。
それにあいつ校舎裏なんてわかるのか？
ちょっと浮かれすぎたか。

「ん？空が暗くなってきたか……？」

見上げた空には暗雲が立ちこめていた。

「これは一雨来そうだな」

憂鬱だ。この場所は天井なんてものは当然ない寂れた場所だから雨ざらしになる。

早く来てくれればいいんだが…

〜〜〜

しかしそれは杞憂となった。
慧はその後すぐに現れた。
さも不機嫌ですと言わんばかりの雰囲気を携えながら。

互いに幾秒か見つめあった後、ややあって慧が口を開く。

「……何ですか？私は慧なんて名前じゃありませんよ」

じゃあ何で来たんだよ！という俺の内心の突っ込みを押さえつつ、努めて冷静に言葉を紡ぐ。

「嘘をつくな慧……。ネタが割れた嘘ほど滑稽なものはないぞ」

それでも慧は表情を崩さない。

「だから私は慧なんて男じゃありません。私は……東雲京です。……立派な女です」

どもりつつもそう俺に慧はきっぱりと言い放った。

――スカートを力一杯握りしめながら。

あぁこいつは本物の馬鹿だ。

気づかれないとでも思っているのか？

「ああ。お前が自分を女と言うならそれでいい。だがな一つ言わせろ。じゃあ何でお前はそんな辛そうなんだよ」

顔をそんなに歪めておいて、絞り出すように女です、はないだろ。

そこで初めて慧に動揺がみられた。

後一押しだ。

「ち、違う！私は辛そうになんか……」

「違うもんか。何年お前の隣にいたと思ってる。……一年も空いてしまったけどその癖が直ってなくてよかった」

その言葉を聞いた慧は素早くスカートを掴んでいた右手を離した。
慧はすぐにしまった、と言う顔になったがもう遅い。
ばっちりと焦った顔を見させてもらった。それはもう言い訳できなくなる程に。

だが俺はまだ気づいていなかった。
「で、だ。何か言い訳あるか？」
この一年が変えたのは、なにも慧の性別だけじゃない。
「……さい」
慧と俺の関係性、
「何だ？」
そこには大きな、
「うるさいんだよ！裏切り者のくせに！」
――――大きな溝があることに。

……ポツッ……ポツッ…ポツッポツッ……ザァァーーー
雨が降り始めた。

諦める？その選択肢はない（前書き）

……お久しぶりです皆さん。待っていた人はいないでしょうが、ようやく学校生活も緩やかになり時間も空いたので投稿を再開しようと思います（汗）週一更新を目指します。

諦める？その選択肢はない

あの日僕のすべてが変わった日。

「初潮です」

医者の口から語られた言葉は僕の理解の範疇を越えるものだった。

「は、生理ですか？慧はこんな顔ですが、息子なのですが？」

「落ち着いてください奥さん。まず半陰陽というものを知っていらっしゃいますでしょうか？」

その内容は僕を絶望の淵へ叩きつけるのに十分すぎるほどの威力を持っていた。

男として生きてきた人生は否定され、僕は女として生きる方が苦労せずに生きられるのだそうだ。

強要はもちろんされなかった。男として生きる道も示された。確かに性機能は女だが、男性ホルモンを打ち続ければ乳房が大きくなることも生理が来ることもなくなる。

「アハッ」

昨日まで当たり前のように感じていたことが、そんな面倒くさいことをしなければできないなんて考えると、嘲笑いがこみ上げてきた。

よく考えて決めてください、と言われ僕とお母さんは診察室を出た。次の人を呼ぶ看護婦さんの声が僕の耳を通り過ぎる。ああ、今は看護士さんか。心底どうでも良い。看護士さんにとって僕が男であろうと女であろうと関係ない。当たり前だけど、人の日常が憎くて仕方がなかった。

家に帰る車の中に会話は無かった。型遅れで排気ガスばかり出す

車のエンジン音だけが静寂の中に響いている。
古びた家に着いた。今の僕にとっては日常の象徴と言っても構わない家に。
僕は一人になりたいと、静かに言うと返事も待たず自分の部屋へと駆けた。
特に飾り気がない部屋。壁に掛けた男物の制服は、僕を睨んでいるようだった。逃げるようにベッドへ倒れ込む。涙は出ない。ここで泣くと、女々しくて情けない女になってしまう気がしたから。偏見だけど。
「馬鹿げてる……」
吐き捨てるように、そう呟いた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ザァーザァーと雨が拓馬の身体を打ちつける。勝手に舞い上がって、自惚れて、調子に乗って、慧を傷つけた。きっと限界ギリギリまですり減らされた慧の心に土足で入り込んで、何も考えずにばらばらに暴れ回って、最低だ、と拓馬は自嘲気味に嘲笑った。
もう、慧は見えない。俺は取り返しのつかない間違いを起こした。何もしなかったことが、取り返しのつかない間違いだった。最低の屑だ。
慧のいる教室に戻りたくなかった。ここからなら、誰にも見つからずに家に帰れる。
どれだけの間雨に打たれただろうか。身体は芯から凍えきり、心はどうしようもなく固まってしまった。

何が悪かった？　過去の俺か？　今の俺か？　ーーどちらもだ。
足りなかったものは何だ？　情報か？　時間か？　ーー覚悟だ。
このまま他人になるつもりか？　関わらないでいるつもりか？

――否だ！

・・・

馬鹿みたいに雨に打たれながら自問自答を繰り返す。今は東雲京のいる教室に戻りたくない。その一心で。せめて、

・・・

一時的に慧を他人の東雲京と扱う覚悟を決めるために。

落ち込む時間は終わった。拓馬の目は死んでいない。それどころか、猛獣が獲物を狙うようにランランと輝いていた。

バカめ。泣きながら関わるなと言うということは、つまり助けてくれと言ってるようなものじゃないか。

都合の良い想像、妄想の類でも構わない。

迷惑だと罵られようとも構わない。

理由も知らされずに、はいそうですかなんて性に合わない。

つか、理不尽だ。

裏切ったとか、あいつが言うのなら裏切ったんだろうけれど、

だからどうした。

俺は裏切ったつもりはないし、まだ親友だと思ってる。

――だから。

――待ってろ。

結局はまだ引き摺ってたりする（前書き）

投稿は毎週日曜日

結局はまだ引き摺ってたりする

俺が教室に戻ると、一斉に授業を受けている生徒としている教師が俺を見た。と、同時にギョッとした目に変わる。その中に東雲京はいない。教室にすらいない。俺は密かにほっと息をつく。あとはそれらを憮然とした表情で受け流すと、何か言いたそうな教師を尻目にさっさと自分の席へと座ってしまった。するとどうだろうか、教師は何事もなかったかのようにまた、異国の言葉をぶつぶつと吐き出した。生徒も幾人かはまだ面白そうにこちらを見ていたが、ほとんどがノートを取る、もしくはケータイをいじるなど各々の作業へと戻っていった。

気だるそうに頬杖をつき時計を見ると、もう一時間目も終わるかという時間。少なくとも俺は三十分以上あそこで立ち尽くしていた計算になる。心に決めた、決心したと言っても悲しいものは悲しいし、まだ時間が欲しいというのも本音だ。策を練らねば……練らねば……ねら……

「……くま……拓馬！」

むぅ、肩が揺すられる、眠い……寝させろ、俺を起こすな……ちっ、しつこい……！

俺は瞼も開けずに口だけ開いた。

「……俺の眠りを妨げるものは何人たりともゆるさん」

「どこの流川君だよ……ったく。おい拓馬、今何時かわかるか？」

この声は、前の席の馬鹿か？　流石馬鹿じゃないか、そんな簡単な質問をするなんて。ついに時計も読めなくなったのか……ふん。俺は教師の声が聞こえないことと、喧噪を鑑みて答えを出した。目

をあけるのはダルいので却下。

「……馬鹿め、簡単だ。一時間目の放課、もしくは休み時間。九時五十分から十時の間。と見せかけて二時間目の放課、もしくは休み時間だ！　十時五十分から十一時！　これでどうだ！」

ふ、ふ、ふ。驚いて声も出せないようじゃないか！

「……阿呆すぎて声も出ないわ……さっさと顔を上げて時計を見ろ。そして自分の馬鹿さ加減を自覚しろ」

……？　面倒だが、仕方がない。馬鹿と言われて黙っていられるほどお人好しではないからな！

ん？　視界が妙に赤いが、寝すぎたか？　目が平常運転していないようだけど……うん、時計は見える。

何々……

「ほら見ろ。時間は四時五十分……四時五十分……？」

ごしごし

「四時……」

ごしごしごし

「そんな馬鹿な……」

ごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしごしごし……

「嘘だ！」

「ホントだ」
「お前が」
「ズラすわけがない」
「日は」
「夕日」
「なんで」
「キレる」
「いい」
「よくない」
「先生」
「諦めてる」
「今は」
「放課後」
「キングクリムゾン！」
「スタンド能力じゃない」
「過程を吹き飛ばす！」
「寝てな」
「残念！」
「無念」
「また来週！」
「だが断る！」
「ええ！？」

馬鹿な……！　私は今、戦慄を感じている！　今まで馬鹿だ馬鹿だ思っていた馬鹿が、これほどまでに私の言葉についてくるとは！
これでは色んなこと諸々を有挧無挧にする作戦が……！

「で、だ」

敏之の顔が、突然真面目なそれに変わった。喧噪が遠く離れてい

く。夕日はあかく敏之を照らした。

「拓馬……お前東雲さんに何をした？」

ーーーーああ、楽しい気分が台無しだ。

六話（前書き）

…お久しぶりです……お久しぶりです（汗）

待っているという方がいらしたので投稿、なんかもうこんな駄作に申し訳ありません……

六話

「お前、東雲さんに何をした」

「……何も」

嘘だ。した。

「……あのな拓馬。お前が東雲さんに話しかけて、東雲さんの雰囲気が一変したのはみんな気づいてる。しかもその後二人でいなくなって、お前だけずぶ濡れで帰ってきた。それで東雲さんに何もしてないってのは嘘じゃないか」

クラスメイトの纏わりつくような好奇の視線が、粘るような視線が、気持ち悪い。気色悪い。

……ああもう関わるなよ。これは俺と慧の問題だ。部外者がでしゃばるな。

「お前が誰かに乱暴するような奴じゃないことは分かってる。けど、如月慧？　だっけ。その人を探すときは見境がなくなることも分かってる」

……知ったような口を聞くな。その名を呼ぶな。なにも分かってない癖に。お前が関わっていいことじゃない。

「だからどうにも不安なんだ。お前がもしかして東雲さんに何かしたんじゃないかって」

うるさいなぁ。俺はこれから東雲京とどうやって向き合ってくか考えないといけないのに。
第一、お前はともかくクラスメイトは確実に疑ってるじゃねぇか。俺が寝てる最中に包囲網完成ってか。自業自得感が否めないが。遠目にニヤニヤしてる馬鹿や、勝手に噂してる馬鹿を減らしてからそういうことを言えや。例え、貧乏くじを引かされたとしても。

「なぁ拓馬？　本当に何もしてないんだな？　俺はそれを信じていいんだな？」
「……ああ」

俺がそう口を開くとあからさまに敏之がほっとした。……なんだ。こいつは意外といい奴なのかもしれん。

「――なわけねぇに決まってんじゃん！」

ぎゃはは、と耳障りな笑い声が上がった。似非不良はどうやらこの結果が気に入らないようだ。気持ち悪い。ああ、しかもそれに追随するように馬鹿共が勝手なことをほざき始めるし。

「どうせ襲ったんだろ？」「やったのか」「楽しかったか？」「混ぜてくれよ」「美人だったよな」

などなどｅｔｃｅｔｃ……頭の悪い発言を複数で俺に言って来やがる。寄るな触れるな近づくな。お前らの臭い口臭がつく。あれか？　仲間とでも思ってんのか？　流石馬鹿。気持ち悪い。

「おい！」

敏之が止めるが馬鹿はニヤニヤとした顔を崩さずにある提案を始

めた。

「今度、俺たちでも襲うか」

瞬間的に沸騰した。この馬鹿は今なんて言った？

「……ざけるなよ……！」

「ああん……？」

俺は、自分が慧に、京にした仕打ちを忘れて怒りに燃えた。

似非不良のリーダーの胸ぐらを掴み、にらみ合いを始めた。喧嘩になるだろうな。いつぶりだろうか。慧との喧嘩なんて口げんかばっかだったし、慧に口で勝つことは出来なかったから、そもそもしなかったしな。だけど、それもどうでもいいと思えた。イライラを誰かにぶつけることが出来ればそれでいいと。

「どうせ手前ぇも襲ったんだろ？　今更なにを嫌がんだよ。ああ、おまえも混ぜて欲しいってか？」

この馬鹿は、まだニヤニヤした顔のままま馬鹿な提案をする。ああ、それにしても一片殴らないと気が済まない。

他のクラスメイトは、遠巻きに見てるだけで何もしようとはしていない。好都合。喧嘩を止めるものも誰もいない。

「ふざける「私は何もされてませんが？」

だが、喧嘩を止めるものは現れた。俺にとって歓迎しない事態。会いたくて仕方がなかった、でも今はもう少し時間をおいてから会いたかった、その人に。

しかし考えれば数奇な話だ。京に対する噂から喧嘩に発展しそう

になり、その喧嘩を止めたのも彼女だなんて。彼女はドアを開いたままにして、そこで立ち止まった。
教室が、しんと静まる。まさか本人が登場するとは思っていなかったのか似非不良の顔も心なしかこわばった。俺？　俺は顔面蒼白だろうよ。どうやって関係を作ろうか考えてるその人に　突然会ってしまったのだから。
京は教室を一通り見渡したあと、口を開いた。
「もう一度言います。私は何もされてません。私の外聞を汚すような勝手な噂を立てないで頂けないでしょうか？」
京の視線は、俺の前にいる不良へと向いた。
「特にそこの似非不良さん。気持ち悪いです。どういったらそういう発想が出てくるのか、少し頭の中を覗かせていただきたい程です」
京は一度言葉を区切ると息を吸い込んだ。
「――――というか見せろ。はぁ？　なんで私がそいつに襲われないといけない。あり得ない。なにがあろうとそいつだけは絶対にあり得ない。意味が分からない。お前のその醜悪な顔で臭い息を吐きながら人のこと馬鹿にするな。鏡を見てから出直せ。そして、世の中に絶望しながら死ね。それがお前のような社会のゴミができる、唯一最後の社会への貢献です。空っぽの頭で理解したならとっとと死に腐れ」
親指を下に向けながら京は言い切った。
放心していた似非不良がようやく鈍い頭で自分のことを言われてることに気づき京へと突っかかる。

「なっ、こっちが黙ってりゃいい気になりやがってーーー」
「――へぇ、意図的に黙ってたんですか？　びっくりです。あなたのような低脳に黙っているだけの知恵があるなんて。てっきり私は、私に言われてる内容をすぐに理解できなくて、あなたの頭が処理落ちしているんだと思いました。まさか違いますよね？　考えた結果ですもんね？　あなたのちっちゃいちっちゃい脳味噌で必死に考えた結果ですもんね？　くそ気持ち悪い」
「野郎……！」
「野郎？　まさか私の性別すら認識できなくなりました？　哀れですね。あなたのような万年発情猿が男女の性別の違いを認識できなくなったらどうなるんでしょ？　大丈夫。おホモ達はすぐにたくさんできると思いますよ？　少なくとも世の中のそういった方々を軽蔑はしませんし、むしろ自らの意志を貫く様は尊敬すらしますがあなたは軽蔑します。私の全力を以てあなたの存在価値を否定します」
「……」
「黙った。黙りましたね？　あはは、なにも言い返せないんですね？　仕方ないですよ。あなたのような低脳発情猿には、言語を操って私の言葉を否定することはできませんものね？　屑で生きる価値がカスほどにも存在しない、馬鹿には叫んだりするしか方法はありませんものね？　弱いやつほどよく吠える。威嚇するのは弱い動物の証拠ですよ。キャンキャン吠えるな似非不良が」

……東雲京はやっぱり慧なんだな……一返せば十返り、黙った所で追い打ちをする。京が言ってる内容は、聞いてみれば同じようなことを繰り返してるだけなんだけど、反論させてくれない、いや反論を許さないで一気に喋るから恐ろしい。あれだけ言われ続けりゃ反論する気も失せるんだ……経験者は語るって奴だな。笑い声は聞こえるのに、無表情なのが一層恐ろしいぜ。
まぁ、あれには欠点があってな。……欠点というか、当たり前なんだが……

「……ナメるなよ、くそアマがぁあああ！！」

――――こうやって言われた奴は大抵キレて慧を襲うんだよ。だからこそ、俺の役割があるんだが。

似非不良が体を震わし、京に向かって走り出す。

「流石似非不良。すぐ暴力か。ところで俺の存在を忘れてないか？」

俺の役割は、慧が精神を叩いた後の武力制圧。心に余裕がないから、たとえ強かろうといともたやすく倒せてしまう。

後ろからってのも卑怯かもしれないが、こいつには腹がたってたから問題ないだろう。うん。

「あん？　がっ！」

「吹っ飛べ」

こんな大振りの回し蹴りも当たってしまうからびっくり驚きだ。心の余裕って大事だね、うん。

似非不良様はいくつかの机椅子を巻き込みながら倒れた。

ふん、すっきりした。

とは言っても、似非不良は一人じゃないので――

「てめえ、やりやがったな！」

「この野郎！」

「ぶっ殺してやる！」

――こうなるのは当然の帰結でして。

「……ちっ！　東雲！　お前だけでも逃げろ！」

その時せめて東雲だけでも逃がそうと画策したんだよ俺は。慧の性格を考えれば、それが杞憂だってことも忘れてさ。俺道化。
東雲は無表情のまま、小型マイクを取り出し再生し始めた。

『なあ、お前がしかけたカメラどうよ？」
『バッチリだ』
『ぎゃはは！　まさかあんな所にカメラがあるなんて思わないだろ』
『うへへ……女子更衣室……女子更衣室……ジュルッ』
『うはっきたね！』

再生を止める。
その機械から流れてきた声は、似非不良たちの声で、言ってる内容は盗撮についてだった。うん、内容は最低だけど、なんかセコいな。
教室の時が止まる。
似非不良たちは顔面を真っ青にして顔を背けた。
ややあって一人が口を開く。

「なにが望みだ」
「私の望みはあなた達の醜悪な顔を一生見ないことです。というわけでさようなら。もう二度と会わないことを願います」

教室にいる全員がクエスチョンマークを頭に浮かべた。二度と関わるな、という意味だろうか？
恐らく不良達はそうとって、教室を後にしようとドアを開けた。
「よお、お前ら。ちょっと職員室に来てもらおうか」
と、言ったのは３０歳独身体育教師。開けたドアの前にいい笑顔

で立っていらっしゃった。

「じゃあ、用がない連中はさっさと帰れよ。さよならだ」

そういってドアを閉めると、後に残ったのは状況を理解できない俺たち。

いや……認めるのが怖いというか、つまり東雲は先にあの音声を教師に聞かせ、自分は教師が来るまでの時間稼ぎを行い、タイミングを見計らって切り札をきる。どうあがいても絶望。なにそれ怖い。まじ怖い。

東雲は何事もなかったかのように、ついと教室を見回した。みんな罰が悪そうに顔を逸らしていく。当たり前だ。あんな噂を面白おかしくたてようとしていたんだから。

その視線は俺の所で止まった。

つかつかと無表情のまま歩いてくる。朝あんなことがあった為、俺としてはもう少し時間を置きたかったのだが仕方がない。

ここは思いの丈をぶつけて、無理矢理にでも関係を持とうと、俺が口を開こうとしたその瞬間の出来事である。

東雲は立ち止まらず、それ所か俺の頭の後ろに両手をまわして――

「――むぐっ……！」

「……ん」

――誰かこの馬鹿で愚図な俺にお教えください。

再会して、泣かした親友にキスをされたとき、どうしたらいいのでしょうか？

七話　慧の気持ち京の心（前書き）

過去の慧の決断と校舎裏で別れた後の京です

七話　慧の気持ち京の心

――半陰陽。聞かされたのはそんな言葉。本当は女性だったとか、身体の中身も女性だとか。

中学生の僕には重すぎる選択で、それでも男か女か選ばなくてはならなくて――

あれよあれよと時は過ぎ、僕は決断する。

「分かりました。あなたの意見を尊重しましょう」

白衣のおじさんが言う。

結論だけ言うと、僕は女の子になることが決まった。その意志決定に一切拓馬は関係無いし、女の子になって驚かしたいという気持ちもない。

ああ、もしも拓馬が僕に惚れたらどうしよう。態度次第では付き合ってあげてもいいかもしれない。あいつこの前フられてたし、何だかんだで優しいし、カッコいいし……はっ！　拓馬は関係ないぞ！　関係ないったら無いんだ！

実際、この決断は辛かった。男として生きてきた今までを否定されるようで、無かったことになっちゃうみたいで、枕を涙で濡らしたなんて一度や二度じゃすまなかった。でも、どうにも僕の心の大部分を占める馬鹿者がいるせいで最初思ったより忌避感は無かったんだ。

僕にとって本当の地獄は手術後だった。

終わった後の喪失感、もう二度と戻れないからこその渇望、安易に決めた訳じゃないけど自分で自分を責めた。

苦しくて。

悲しくて。

辛すぎて。

胸の寂寥感。ぽっかりと胸に穴が空いてしまったようで、そこか

ら抜け落ちた何かを探すように一度や二度ならず暴れた。
だけど泣きだけはしなかった。
拓馬が来るまでは、泣かないと決めた。絶対に。
共働きの両親よりもずっと一緒にいたのが拓馬だ。小さい頃からずっとずっと、いろんな初めてを拓馬と経験した。
だから、女の子になってから最初の泣き顔と、本当の意味で生まれ変わるのは拓馬が来てからにしようって――

――愚かな僕は考えたんだ。

一日待っても拓馬は来ず。二日待っても拓馬は来ない。三日四日と日にちは進み、五日六日と針は進む。一週間待って二週間待ってようやく僕は気がついた。
拓馬にとって僕はとるに足らない人間なんだって。いてもいなくても変わらない。その他大勢の一人なんだって。
引っ越しの話をされたとき、僕は迷わず頷いた。
町を去るときも、一切僕は泣けなかった。
それから少しして、面会謝絶を知ったんだ。
どうしようもなく凍ってしまった僕の心は、それを知っても癒えることは無かった。拓馬は来なかった。それだけで十分すぎたのだ。
名前を変えて、東雲京。昔の僕はどこにもいない。無感動、無表情に生きてくうちに、家族にすら腫れ物扱いされるようになっていた。
それでも僕は泣けなかった。
私はただの一度も泣いたことがなかった。
いつの間にか中学校は卒業し、高校の入試は一応やらされた。
そして――

――私は拓馬と出会ってしまった。

。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。・。

ここはどこ……？　僕はどうしてこんな場所にいるんだっけ……？

「はあ……はあ……」

校舎の壁に身を任せて荒い息を吐いた。外は雨。私はあの男に呼び出されて……ああもうイライラする。
嫌いだ。嫌いだ。嫌いだ。あんな奴、今さらどうして……！
最悪だ。奥に奥に閉じこめたはずの感情が、出て来ちゃう。
……ああ駄目だ、ここにも雨が降ってるや。

「……っく……ひくっ……ひっ」

教室に戻るのは嫌だな、でも荷物あるし……保健室のベッドで放課後まで時間を潰そう。そこならきっと、雨も降らないだろうから。
私は虚ろな歩みで保健室へと向かった。

どういう道順で保健室に行ったかなんて覚えてない。気がついたら保健室の前だった。ノックもせずに入室すると、こちらを見て驚いた顔になる二十台後半の独身、もとい保健室の先生。
「……今とても腹が立つことを言われた気がするわ」
気のせいです。
「……はあ……まぁいいわ。とりあえず椅子に座りなさい」
私は授業をサボるために寝に来たのです。
「相っ変わらず堂々とサボタージュ宣言するわね、あなた」
えっへん。
「威張るなら無表情は止めなさ……いや、今日は違うか」
なにがです？

「まずは椅子に座りなさい」
えー。
「座りなさい」
……はい。
言われたとおりに椅子に座った。仲が妙に良いのは私が学校に来る際必ず保健室登校だったから、だけではない。私がこうなってしまった後に、真っ直ぐ真っ正面から向き合ってくれた唯一の人だから。ぶっきらぼうな物言いに不真面目な態度でテキトウな性格だけど、とても優しい人である。
……おかしい。私はこんな評価を彼女にしていなかった。お節介で鬱陶しい奴、そんな評価だった気がする。
心境の変化があった？　どうして。
「で、なにがあったの」
「特に、なにも」
彼女はやおら立ち上がるとタオルとコヒを手に持って私の前へ座った。っと、両方とも私宛でしたか。
「へえ……ずぶ濡れで泣きながら現れといて、特になにもないと」
タオルに身をくるんだ私はどんな表情だったのだろうか。彼女は嘆息した。
「全くもう、この無表情娘は……」
「わ……やめ……」
グイグイグイっと顔をハンカチで拭われる。
「はい、綺麗になったわって、ちょっ！　なんでまた泣くのよ」
ツツツゥーッと私の瞳から涙が流れる。今度は知覚できた。確かに私は今泣いている。
とっくに凍ってしまったと思ったのに、大嫌いなあいつは迷惑ばかり。
……僕が昔決めたことだっけ、あいつと再会するときが泣くときだって。つまりそれが凍った感情の引き金？
この胸の痛みはなに――？

分からない。分からない。分からない。悲しい、切ない、辛い、怖い、痛い。どれも懐かしくて、でもそのどれにも該当しない、甘くて疼くような痛み。

「改めて聞くわ――なにがあったの？」

「――西島拓馬」

口をついて出たのは彼の名前。彼のこと大嫌いなはずなのに、私の中に勝手に巣くう彼。

「ああ、彼ね。もしかして詰め寄られた？　如月慧くん、ちゃん？　を知らないかって」

呆れたような彼女の声。昔の名前と内容に私の疼きは高まる。

「だとしたらごめんなさいね。彼、普段はいい子なんだけど如月慧くんのことになると人が変わるのよ」

切ない。嬉しい。じくじくと甘く疼く。私も彼の中に存在していた。

「見境がなくなるというか、その子のこと本当に好きなんでしょうね。入学して次の日には職員室まで乗り込んでいったのよ？」

笑いながら彼女は話した。彼が入学してこれまでの武勇伝。

彼の軌跡を聞けば聞くほど、甘い疼きが媚薬のような高揚感に変わっていく。憎しみが愛おしさに変わっていた。

「この学校に入学したのだって、その子がいる可能性が一番高かったからしいわよ」

彼は私と同じように、私がいなくなってからこれまでを無駄にしてきた。

それがたまらなく愛おしい。それを知った今では会いに来てくれなかった憎しみなんて、会えた嬉しさに比べたら塵芥に等しい。

元々私の憎しみなんて会えない切なさが転じただけのこと。‘会いたい’というオモいを封じた、会いたくない。好きだから、嫌い。

一年近く凍結していた私の心はいともたやすく溶けていった。

……さて、考えてみて下さい。取り戻した感情はこれまでの私の

言動を省みた。そうすると、どうなるかを――

「……先生、とりあえず寝かせて下さい。死にそうです」

「ん？　ってわっ！　顔真っ赤じゃない！　どうしたの、本当に珍しいわね」

「なにも聞かずに寝させて……」

「……はあ、わかったわ」

カーテンで仕切られたベッドの一つに潜り込んだ。顔は真っ赤、動機は激しい。なぜならなぜなら――

――とても恥ずかしいからさ！

フッフへ、へ……なんだよこれ、‘凍った感情’とか……ただ会いに来てくれなかったから色々と物事が億劫になってただけじゃん……再会したときに怒ったのは、いわゆる癇癪――拗ねてただけですね分かります！

まあ実際問題僕は拓馬と育ってきたようなものだし？　両親は半陰陽って分かった頃から余所余所しくなったし？　手術後なんて目に見えて余所余所しくなったし？　精神的不安定になってた時の拠り所が拓馬だったし？　男としてのアイデンティティなんてなくなったから精神的にヤバいけど……って割と危ないことには変わりないわけですか、そーですか。

でもね、世界で一番不幸な私を素で行っていたのは痛々しい。もし拓馬と再会&保健室の先生による拓馬の話が無かったら……私は私のままでした。

ところで‘僕’なのか‘私’なのか自分でも分からないんだがどうしたらいいと思う？　笑えばいいと思うよって言ったらブチのめすのであしからず。残念ながら表情筋が固まってるためしばしのリハビリが必要だと思われなので、大きな表情の変化は無理ポなので

す、でげすです。
んむ、いい感じに思考が混沌としてきたよ。答えが見つけられそうにないね、大変だ。僕としては今すぐ拓馬の所に行って抱きしめたいが、私としてはしばしの時間を置いて余裕を持って拓馬を抱きしめたいと思うのだがどうだろうか？　結局抱きしめることに変わりはないね、ははは。
おかしいね、おかしいな。僕の自意識は一応男のはず。昔からいくら拓馬とずっといたからってＢＬチックな感情はないのに、どうしてだろうか狂おしいほど拓馬が愛おしいよ。気持ち悪いね。吐き気がするよ。僕のことだよ。
寝よう。眠ろう。疲れているんだ。久しぶりに頭一杯働かせたからね。おやすみ――

――少女は気がつかない。長い間抑制された感情が別のものに変じていることに。
――少女は思い出さない。かつての絶望、かつての渇望と、かつての親愛を。
――少女は気がつけない。自分がいかに危ういバランスの上に成り立っているかを。

一度狂ってしまった歯車は、部品を変えて廻り出す。ギチギチと不協和音を奏でながら。それが壊れるその時まで。

七話　慧の気持ち京の心（後書き）

…駆け足気味で申し訳ありません。
あまりにも昔に考えた設定に、自分すらどうしたらいいのか……
うぅむ……明らかに慧の思考がぶっ飛んでるのです…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8063l/

親友、その次は？

2011年12月27日00時47分発行